



2018年2月

認知症患者における口腔内不良の予防に関する研究 ～口腔ケアは認知症患者の健康維持・QOL維持に期待できます～

株式会社オルトメディコでは、認知症患者の口腔内環境の悪化に着目し、口腔ケアによって認知症患者の口腔内環境に与える影響を、医療法人社団新聖会と共同で調査いたしました。本研究結果は、第18回日本早期認知症学会学術大会（2017年10月14日～15日実施）にて発表し、若手奨励賞を受賞しました。

研究の背景・目的

高齢化の進展に伴い、認知症患者は増加していく見込みであり、厚生労働省から2025年には認知症患者は約700万人前後まで上昇すると推計が報告されています（図1）。日本歯科医師会より報告されている「健康長寿社会に寄与する歯科医療・口腔保健のエビデンス2015」によると、多くの横断研究によって認知症患者の口腔内は状態が悪いことが確認されています。口腔衛生不良は嚥下機能の低下をもたらし、口腔衛生状態は認知機能や身体機能とも関連するとの報告があるため、口腔内ケアは認知症患者の栄養状態ならびにQOLの維持に極めて重要であると言えます。

そこで、本研究では歯科衛生士による定期的な口腔内ケアが、高齢者福祉施設に入居している認知症患者の口腔衛生状態に及ぼす影響を調査しました。

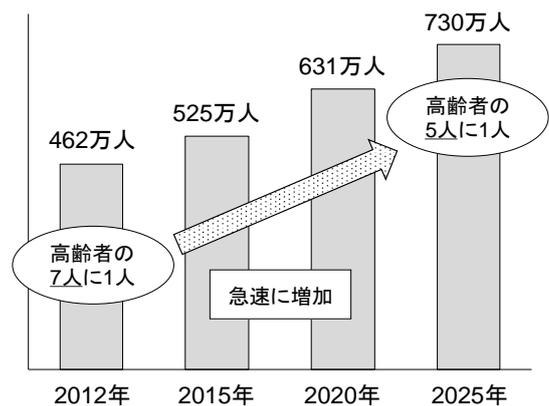


図1. 認知症の高齢者人口推移 (推計)

研究の内容

対象者: (株) オルトメディコの提携先グループホーム（認知症対応型生活介護）に入居している60-99歳の認知症患者760名

試験デザイン: コホート研究

内容: 週に1回、歯科衛生士による歯磨き、舌の清掃、口腔内マッサージを行いました。評価項目は、現在歯数、口腔機能とし、口腔機能の評価には口腔機能アセスメントシート*を用いました。口腔ケア開始1年目と口腔ケア経過年数ごとに比較し、口腔ケアの影響を調査しました。

※解析に使用したデータは、(株) オルトメディコの提携先歯科医療機関である医療法人社団新聖会が2010年～2017年の7年間に行った施設での口腔ケアデータを用いました。



結果の概要

1. 口腔機能に与える影響

反復唾液嚥下テスト* (RSST) 積算時間は、各年数との間に有意差は認められませんでした (図2)。

口腔機能アセスメントシートから評価した口腔機能得点においても、各年数との間に有意差は認められませんでした (図3)。

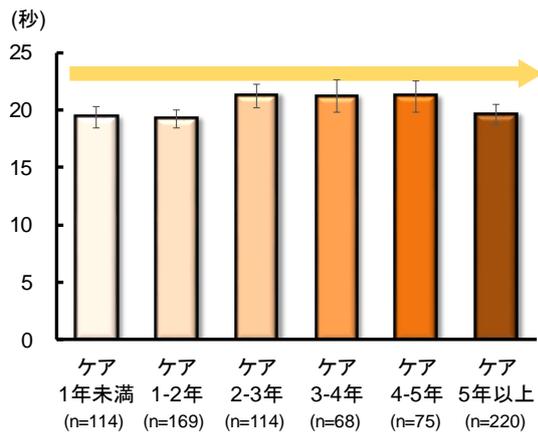


図2. RSSTの積算時間の評価

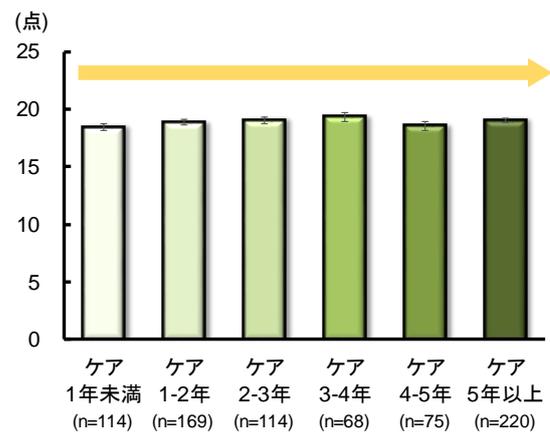


図3. 口腔機能の評価

2. 歯数に与える影響

ヒストリカルデータ* (平成23年 歯科疾患実態調査結果)と比較して、口腔ケアを施した場合には歯数が維持される結果となりました。特に、85-89歳の間ではコントロールよりも歯数は有意に高値を示しました (図4)。

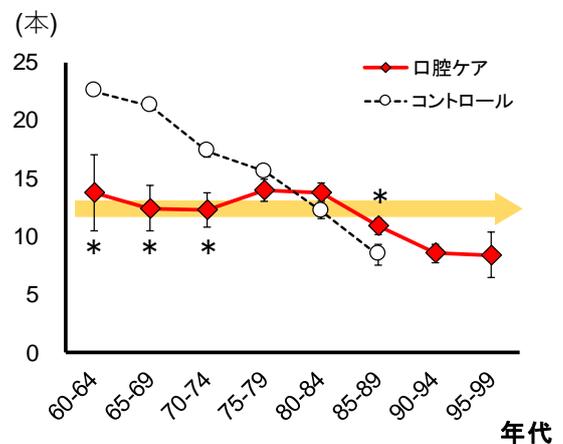


図4. 年齢ごとの歯数

(*コントロールと比較して有意差あり, $P < 0.05$)

まとめ

口腔ケアは認知症患者の口腔機能と歯数を維持することが確認されました。口腔機能および口腔内衛生の維持・向上は生活の質 (QOL) との関連が深いことから、口腔ケアによる認知症患者の QOL 維持が期待されます。

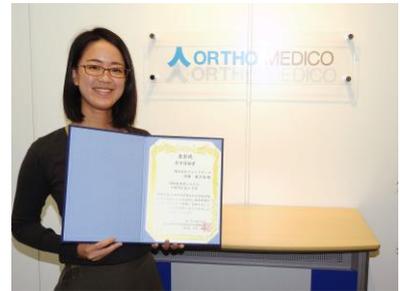


Press Release

株式会社オルトメディコ
東京都文京区小石川1丁目4-1
住友不動産後楽園ビル2階

学会発表

第18回日本早期認知症学会学術大会にて発表し、弊社所属の馬場亜沙美が若手奨励賞をいただきました。



用語説明

【口腔機能アセスメントシート】

厚生労働省の介護予防マニュアルに記載されている別添資料 5-2 を指します。質問項目・観察項目等が表記されており、回答を得点化することで口腔機能を評価することができます。口腔機能得点は値が低いほど機能が高いことを示します。

【反復唾液嚥下テスト (RSST)】

反復唾液嚥下テストとは、食塊のない状態で強制的に唾液嚥下（唾液を飲み込む動作）をしてもらい、どの程度嚥下運動が遂行されるかを評価するものです。30秒間の嚥下回数をカウントします。

【ヒストリカルデータ】

過去の文献や報告のデータを指します。

お問い合わせ先
株式会社オルトメディコ 広報係（大内・渡辺・大塚）
〒112-0002
東京都文京区小石川1丁目4番1号 住友不動産後楽園ビル2階
TEL： 03-3818-0610 Mail： support@orthomedico.jp



February, 2018

Oral Health Care May Prevent Dementia

Oral health care maintain the health and QOL in dementia patients

Background and Objective

As the Japanese population has aged, the number of dementia patients has increased. Poor oral hygiene causes a reduction in oral functions. Moreover, previous studies reported that oral hygiene conditions were related to cognitive and physical functions. Oral health care is important to maintain proper nutrition conditions and quality of life (QOL) in dementia patients. Therefore, we investigated the effects of oral health care practices performed by dental hygienists on dementia patients living in nursing homes.

Methods

The study was conducted a cohort study in 760 dementia patients between the ages 60-99 years, lives in nursing homes (community-based long-term care for dementia patients) in Tokyo, Kanagawa, and Saitama prefectures associated ORTHOMEDICO Inc.

Details: Dental hygienists brush dementia patients' teeth, cleaning their tongue, and massaging inside of their mouth.

Results

Oral health care maintains the number of remaining teeth.

Compared to historical data (the survey of dental diseases in 2011) as the control group, which no regular oral health care by dental hygienist, oral health care maintained the remaining teeth. Particularly, dementia patients ages 85-89 years who underwent oral health care showed a significant difference in the number of remaining teeth compared to the control (Figure 1)

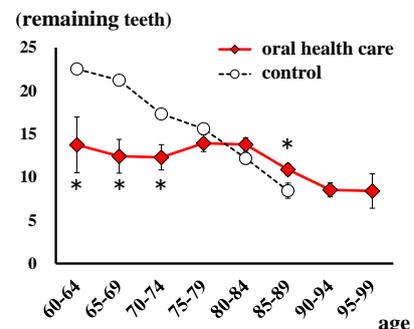


Figure 1. The relation between age and remaining teeth
(* $P < 0.05$ vs the control group)

Summary

Regular oral health care preserves the number of remaining teeth in dementia patients. The number of remaining teeth preservation is related to oral functions, oral hygiene preservations, and QOL improvements. Therefore, oral health care may improve QOL.

Contact Information
ORTHOMEDICO Inc. (Publicists: Ouchi, Watanabe, or Otsuka)
2F Sumitomo Fudosan Korakuen Bldg.,
1-4-1, Koishikawa, Bunkyo-ku, Tokyo, 112-0002 Japan
Phone: +81-3-3818-0610, E-mail: support@orthomedico.jp